

ブラジル人学校、ベルマーク始めたよ!

滋賀・東近江市の日本ラチーノ学院

滋賀県にあるブラジル人学校4校が、今年5月からベルマーク運動の参加校に仲間入りしました。協賛会社のあいおいニッセイ同和損害保険(ベルマーク番号92)がブラジル大使館などの協力を得て3月から始めた「在日ブラジル人学校向けベルマークキャンペーン」に呼応したものです。このうちの1校、東近江市にある準学校法人日本ラチーノ学院を訪ねてみました。

同学院があるのは、鈴鹿山脈のふもとに位置する甲津畑地区。児童減少のために閉校した旧甲津畑小学校の校舎を市から借り受け、2015年に開校。現在1歳から高校3年生まで189人が、県内各地からスクールバスで通学しています。

学校では、実はベルマークのことは誰も知らなかったそうです。でも、あいおいニッセイ同和損保のキャンペーンで、「自分のため」にすることが、「他人(ひと)のため」にもなるのがベルマークだと知り、日頃から子どもたちに説く「ひとのために」という考えに共通していると参加を決めたそうです。

カミムラ・カイオ学院長から先生方と子どもたちへ、ベルマークの趣旨や活動内容が伝えられました。その際、あいおいニッセイ同和損保が作った財団資料『な～るほど!ベルマーク』のポルトガル語版が大いに役立ちまし

た。「個人のものではなく、皆が使えるものを買う、という目的が定まっているから、理解も浸透もスムーズで早かった」とカイオ学院長。集めた後の仕分け・集計作業も「高学年の生徒がするので問題ない」といいます。

「ベルマークはすぐに資金として活用できるわけではないが、たとえ時間がかかってもよいので、生徒には最後まで関わってほしい。やり遂げることが大事。そして、ボールひとつでも買うことができれば」と、カイオ学院長は子どもたちの活動に期待を寄せていました。

校舎の壁にはポルトガル語に翻訳されたポスターが貼られ、ブラジルの国民的キャラクター・モニカの絵も入った回収箱が各教室の入口に置かれていました。取材した日には、子どもが得意げにベルマークを箱に入れる瞬間に立ち会えました。「国民性でしょうか?すでにクラス対抗の競争が始まっているようだ」とカイオ学院長が笑いながら教えてくれました。



今回の取材は、あいおいニッセイ同和損保代理店の地元支店長、畠中昭夫さんに手配していただき、ポルトガル語の通訳もお願いしました。急な訪問にもかかわらず受け入れてくださり、ありがとうございました。Muito Obrigada! (ポルトガル語で「ありがとうございました」)



①教室で授業を受ける子どもたち ②ラチーノ学院の校舎 ③この日の給食。ビーフストロガノフと豆の煮込みフェイジョン ④初めての習字 ⑤昼休みに職員室にマークを持ってきた児童

東北被災地校にマーク贈って10年

コープこうべのボランティアサークル

生活協同組合コープこうべ(神戸市東灘区、組合員約172万人)は、組合員がボランティアサークルを作ってベルマークを仕分け・集計し、被災地の子どもたちに贈る活動をしています。5月13日に開かれた交流会にはベルマーク財団の職員も出席し、各サークルに感謝状をお贈りしました。

コープこうべは、兵庫県を中心に事業を展開しています。ベルマークのボランティアをしているのは第1地区(川西市・宝塚市・伊丹市・尼崎市・猪名川町)の9つのサークルです。東日本大震災の発生後、「ベルすみれ」「チーム菜の花」などのサークルが立ち上がり、ベルマークを収集・仕分け・集計して、緑のあった宮城県の気仙沼市立松岩小学校と南三陸

町立伊里前小学校に送付してきました。過去10年で、寄贈したベルマークは累計159万点にのぼります。

交流会は、コープこうべの第1地区本部で開かれ、普段は別々に活動している各サークルの代表とメンバー計15人が出席しました。会では、まずこれまでの東北支援についての経緯報告がありました。震災が発生したその日のうちに、組合員から支援の問い合わせがあり、そこから話し合いを重ねたそうです。阪神・淡路大震災を経験した身として他人ごとではない、あの時の恩返しをしたい……子どもたちを支援したい一心だったという当時の心境が語られました。

店に回収箱を置いて収集を呼びかけるとともに、仕分け・整理するボランティ



感謝状を手に集合写真

アを募集したところ、複数のサークルが結成されました。参加者も増え、作業も進んだことから寄付は毎年欠かさず続け、現地を訪問したこともあるそうです。

続いてベルマーク財団職員が、運動の現況や寄贈マークの活用方法について説明しました。参加者からは「長いこと仕分けはしていたが、今回初めて運動の全体像が分かって良かった」「海外も支援しているとは知らなかった」などの感想

があがりました。

交流会を主催したコープこうべ職員のかいろう 戒能竹子さんは、「ベルマークの活動は今年で12年目となりました。今回、ボランティアの皆さんに労いの言葉をいただき、大きな励みとなりました」と話しました。サークルのメンバーは「目立ちたいわけでもなく、淡々とコツコツと今まで通り作業するのみ」と、今年度も活動を継続していくと語ってくれました。

一輪車スキル、2時間で大幅アップ

和歌山・高野町立花坂小で一輪車講習会

和歌山県の高野町立花坂小学校(田所勝美校長、児童9人)で6月22日、ベルマーク財団が主催する一輪車講習会が開かれました。この日は、同県かつらぎ町立梁瀬小学校(山田真穂校長、児童4人)と合同での開催となりました。一輪車講習会は財団がへき地校支援のために実施しており、この日が今年度初めての開催でした。

講習会は、田所校長の「今日は児童みんな、待ちに待った一輪車講習会で本当に楽しみにしていました。この秋にある運動会で、みんなで一輪車の技が披露できるようにしたいです」というあいさつから始まりました。

この日の講師は、日本一輪車協会の公認インストラクターの佐藤彩香さんと、2020年の全日本一輪車競技大会ソロ演技の部アーティスティック部門チャンピオンの小木真由子さんです。

午前9時30分から、花坂小と梁瀬小の児童合わせて13人が体育館に集まり



ました。インストラクターの二人は自己紹介したあと、模範演技を披露しました。小木さんのソロ演技では、初めて目の前で見る華麗な演技にみんなうっとり。その後の「片足タイヤ乗り」「スピン」「アイドリグ」などの様々な技にも、大きな拍手がわきました。

児童たちの手を取っての実技指導では、講師から「初めはつま先に力を入れて乗ってみて」「足の太ももとお腹に力を入れてみて」とアドバイスがありました。体育館の壁伝いなどは先生方にも補助してもらいながら、練習を繰り返しました。

講習の最後に、児童代表が「講師のお

二人にアドバイスしてもらい、できなかった技もできるようになりました」と、感想を伝えました。講師は子どもたちに「みなさん今日で大変上手になってくれました。これからも、みんなで教えあいながら続けて練習してください」と話しました。

